英太叔父さんからの１通目のお手紙です。

御尊父様の法要の義にお招き戴き御礼申し上げます。

御尊父様は、長男として相応しいリーダーでした。その中でも天体観測の事、山登りのありかたのこと、について原則から、楽しみ方まで順序良く教えて呉れました。

昭和 16 年から昭和 20 年に至る頃は、開戦、その後敗戦という激動の頃で物資は欠乏していましたが、天体観測をするという執念から、各々が手分けして、レンズを磨く・木製の歯車を設計して造る・自動追尾に必要なゲージを蜘蛛の糸で造る作業など、希望に充ちた日々でした。

終戦後は山登りに出掛けましたが、道に迷ったら必ず戻って分岐点を調べることなど注意されました。山で遭難することなど思っても見なかったことが発生しました。安全に対しては万全を尽くしていただけにショックは大きかったと思います。所謂ナイロンザイル切断事件です。この事件によってザイルの欠陥が解明され多くの登山者が救われたと思います。

振り返ってみると、人間の生き方について私共に教訓として残してくれたと思います。

平成 18 年 9 月 14 日

若山 英太

中京讀賣

名古屋は食甚六〇%

けふ黒い太陽を科學する兄弟

三井信託

頼母し日本科學陣

英太叔父さんと父の望遠鏡観測時代の新聞です。

読みづらい古い新聞の文字を読み易いように直してみました。青の文字は私が調べてつけた解説です。

==========

中京読売新聞　　昭和 16 年 9 月 21 日

名古屋は食甚 60%

今日黒い太陽を科学する兄弟

今日日食―聖戦下の大陸を幅 100m の黒帯をひいて横切って行く“黒い太陽”を科学する日食観測隊は石垣島をはじめ臺湾、漢口、南京、基隆など十数箇所に鐵桶の観測陣をひいて今日の天候如何と空を睨んでいる。名古屋で見られる日食は食甚 60%余りの部分食だが、この日食を化学のメスで解

剖しようと自製の観測所に立て籠もって黒い太陽に腕を撫して期待しているたのもしい兄弟がある。名帝大理工学部電気科 2 年生若山繁雄(24)君と津島中学校 5 年生英太(18)君兄弟がそれだ。海部郡佐織町見越 5 の自宅の庭の一隅に建てられた天体観測所の中から箱形の巨大な反射望遠鏡がスックと大空に突き出ている。名大物理学教授須賀博士と過般広島高工師教授に栄転した元名高工村山教授の指導によって建てられた観測所の中で弟の英太君「もうすっかり用意が出来ました。あとは兄さんの帰宅を待つばかりです。ただ天候が一寸心配です」と空を見上げていた。主任格の繁雄君は名古屋市千種区坂下町 2 の 34 石岡正一氏方に下宿し名帝大に通学している。同君を訪問して日食観測の話を聴く。「日食の観測は今度が初めてです。昨年 11 月彗星が太陽面を通過した時、太陽を撮影した経験があります。その時は 5 インチの反射鏡を 3 インチに絞りプロセス乾板に 3 号黄色フィルターを使用して露出 300 分の 1 秒で太陽面を通過する彗星の撮影に成功しました。今度はプロセスパンクロ乾板に赤色フィルターをはじめて使ってみたいと思っています。撮影方法は先ず反射鏡に受けた太陽をサン・ダイヤゴナル(プリズムの表面反射)で 45 度に屈曲反射させる。サン・ダイヤゴナルで反射された光線は 4%に弱められる。これを更にアイピースで拡大乾板に投影して撮影するのです。使用する 5 インチ反射鏡の焦点距離は 114m です。名古屋で初鱈(欠け始め)午後零時 36 分、食甚(食の最大)同 1 時 54 分、食分 60%、復円(欠け終わり)3 時 5 分位です。[写真は準備に忙しい英太君と繁雄君(円内)]

頼もし日本科学陣

出でよアマチュア―天文学者

名帝大教授須賀太郎博士談

「日食観測が直ちに応用されて人類に齎す効果は無いが何時応用されるか判らぬ日食を天文学的にまた物理学的に観測し科学することは科学に真の底力をつけるものであると思います。現下未曾有の聖戦下に於いて大陸の第一線にまで数多くの観測隊を派遣し日食をきわめる日本の科学陣は頼もしい限りです。私は物理の分光学的部門で太陽との関係が深いので今度の日食観測隊には是非参加し微粒子日食の観測、閃光スペクトルの赤外写真撮影などを狙っていたのですが米国より帰ってきたばかりだったので準備が整はず参加研究することが出来なくなり残念に思っています。名古屋日食の食甚は 21 日午後 1 時 54 分、食分 60%の部分食ですが初鱈、食甚、復円の時間や食分など正確に測定し天体の運行その他を真面目に観測するアマチュアー天文学研究者が続出し戦時下日本の科学陣に貢献することを願っています」

今回の日食観測による研究目標は最も基本的な太陽と月との相対位置を決定することからコロナやプロミネンス(紅焔)採光のスペクトル(分光景)または相対性理論に基き重力によって星の光線が屈曲し日食時に星の位置が変わるアインシュタイン効果を實證するための星の写真の撮影などの外に眼に見えぬ日食即ち“微粒子日食”や“紫外線日食”などの観測がある。但し名古屋地方に於いては食甚は僅か 60%なので普通の光線を放出しているので、ここではコロナやプロミネンス、採光スペクトルの観測や星の写真の撮影は出来ない。ただ初鱈から食甚、復円の時間の測定と写真の撮影によって月の運動を正確にキャッチすることは出来ます。

英太叔父さんからの 2 通目のお手紙です。

　十二月に入って残りが僅かとなってしまいましたが、今年は兄様が亡くなり悲しい年でした。
お宅様にしても掛け替えのない御尊父様を亡くされた悲しみは察するに余るものがあると思います。
　又その節には失礼の数々を重ねたにも拘らず、心尽くしの品を届けて頂き有り難く頂戴しました。兄様に招かれた晩餐会だと思い故人を偲んで山の話をしました。その中でも酒宴の席でしみじみ歌う「安曇節」が聞こえてくるようです。私も八十二才を越えて親兄弟を亡くし、背中を秋風が通り過ぎて行くような思いがしますが、息のある間は山へ行って自然を見たり写したりしたいと思います。
　余分になりますが、今年の夏、山の写真を撮りに出掛けたので、その話をします。

　山で見る星は格別美しいと言われている。その美しさを写真に撮れないものかと、かねがね考えていたが闇雲ではあるが出掛けることにした。場所として町の明かりが届かない谷間であること、山が近くに見えることが条件だ。上高地か乗鞍高原の当たりが適当であると考えたが歩く距離など思うと、今回は常念岳が見える一ノ沢に行くことにした。一ノ沢には常念岳への登山道があって、中程までは自動車道が完備していることを聞いていたので車で行けば歩かなくても良いと思った。
　防寒着・カメラ・食糧を詰めたリュックを見ると重さはとにかく大きさに気が引ける思いがした。「年を考えたら」と言う声が聞こえてくるようだ。それにビバークするようなことは無謀としか言いようがないが着々と準備をして出掛けた。地下鉄に乗ったとき他の乗客がどのように見ているかが心配だったがあまり関心が無いらしく、じろじろ見る人は居ないので良かったと思う。千種駅で JR 長野行に乗り換えた。八時六分発だった。列車はかなり込んでいて指定席は売切れだったが自由席に空きがあって、やっとの思いで腰を下ろし気持ちが落ち着いた。松本駅で大町行きに乗換えて穂高駅に向かった。大多数の人はビジネスマンらしく眠ったように目を閉じているが大町行きの列車はローカル線で生活の匂いがした。お年寄りから若いお嫁さんらしい人、中年の力強そうな男性も、それぞれが用達に行くようであるが、そこに中年の女性の集まりがいた。何の用かしらと見ていると穂高駅で下車して、駅前に居たマイクロバスに早々と乗った。駅舎を出てあたりを見渡し停車してい

るタクシーに吸い取られるように乗り込んだ。「一ノ沢へ行きたいが」と言うとすぐに発車した。「一ノ沢の登山道は七月の豪雨で寸断されて通行止めになっているから行ける所まで行きます。そこからは歩いて下さい。二時間で上の駐車場に行けます」と言った。ここまでくれば登るより外に無いと思い全身が引き締まる思いだった。舗装道路をしばらく歩いて行くと、谷川に架かった橋が流されて、回り道である。崖縁にそった所を危なそうだか抜け出すことが出来た。土石流で道を塞いだ所、舗装の下が抉られ亀裂のある所などを通り抜けた。傍らにある胡桃の大木が酷く荒らされ実を取った皮が散乱していた。熊が出たらしい。道は谷間で視界が狭く見晴らしが悪いが登って行けば広くなると思い一時間半ぐらい休み休み歩くと開けた所に出た。リュックを下ろしここを拠点にしようと思う。多少高低差のある斜面にシートを三枚重ねて敷いた。近くにある流木にカメラを取り付け、これで暗くなるのを待つばかりである。夕方になって山の頂にあった僅かな雲も取れて全天が青空となって風も無く絶好のコンディションであるが、ただ岩肌の見える山の頂上は見えないので残念だが今となっては仕方なく思う。暗くなるに従って明るい星から順次多く見えてくる。ひときわ目に付くのは、天上近く白鳥座の十字星の輝きである。暗くなるに連れて天の川は一段と輝いて見える。設置したカメラのシャッターを五分間、十分間と区切って押した。シャッターの合間にライトを点しレンズを見ると夜露で雲って見える。慌ててガーゼで拭うがすぐに曇るようである。レンズのフードを暖めると良いと思ったが、気を取り直してそのまま続けた。輝いている十字星も天の川も西の空に傾き、寂しいが東の空に縦長の四角形に囲まれた三ツ星が力強く昇ってきた。オリオン座である。しばらくして東の空の稜線が浮き出たようになって、白々と夜が明けてきた。このように天候に恵まれ穏やかな夜を過せたことに感謝した。

　その時の写真を同封します。(画面の下に山が写っていない。レンズが曇ったことが失点です)

平成 18 年十二月一日

若山 英太

送って頂いた写真です。